

漢法苞徳塾資料	No. 246
区分	治療論・臨床
タイトル	痞気（脾積）について 難経の記述から…治療問題を考える
著者	八木素萌
作成日	1994.12

◎積は外感病のこじれたものである

- a. 「積聚論」は、発症の機序を説明して五臓分類を明らかにしているが、治療的な記述はない。しかし、例えば冬に肝が病むと肝は病を脾に伝え脾は更に腎に病を伝えようとするのであるが、冬は腎の旺気する季節であるから、腎は病が伝えられることを拒否することができるので、[脾よりの伝病]を拒んでしまうことになる。したがって病は行き場がないので[脾に滞留する]ことになる。これが[脾積]となる。と記述しているのである。」

〈1990.02.11 「気の所在を刺す」に関して〉。

- b. 「…以冬壬癸日得之。何以言之。肝病伝脾。脾当伝腎。腎以冬適旺。旺者不受邪。脾復欲還肝。肝不肯受。故留結為積。故知痞気以冬壬癸日得之。…」(五十六難) 〈…モッテ冬・壬癸ノ日ニ之ヲ得タルトハ、何レヲモッテ之レヲ言ウヤ、肝病・脾ニ伝ヘ、脾ハ腎ニ伝ウベキモノナリ、腎ハモッテ冬ニ旺スルニ適ウ、旺スルモノハ邪ヲ受ケザルモノ、脾ハ復タタビ肝ニ環エサント欲ッスモ、肝ハ受クルコトヲ肯ンゼザルナリ、故ニ留結シテ積ト為レリ、故ニ知ル痞気ハモッテ冬ノ壬癸ノ日ニ之レヲ得タルナリト。…〉と記述されている。

ここで問題なのは「冬の気」のなかでも最も「水性」の明快な日柄「壬癸の日」に【之れ=痞気】を得た、冬のなかでも最も冬らしい日に「痞気」の病を得ている点である。そして「病を得た臓」が「肝」であると言う点である。

臓病の伝変規律に従って、病は脾に伝えられる、それは更に腎に伝変されるという道筋である、しかし、腎は季節的な旺気臓であるから、病が脾から伝えられてくることを拒否できる位取りにいる、したがって、陰病の伝変の循環規則が、ここで断ち切られる、そのために病は脾に留まった、それが痞気=脾積なのである。こういう点から考える「五行の循環」の局面と臓腑の関係とが問題になってくるのである。

- c. ここでは[春の旺気臓=肝]が、冬の邪に侵されていることが示されているのである。つまり「他邪に侵されている」のである。したがって[外感病=外傷病のこじれたもの]として位置付けるべきものである。

参考事項～十干の五行配当

甲乙	丙丁	戊己	庚辛	壬癸
木	火	土	金	水

陽干……甲・丙・戊・庚・壬

陰干……乙・丁・己・辛・癸

◎なぜ外邪による病と考えられるか？

- a. 五行の循環には「旺・壮・死・囚・休」の五つ相が指定されている。冬には肝は「旺」の局面に位し、腎は「旺」の局面に居るのである。つまり、五臓の位置を当て嵌めると「冬－旺－腎・春－壮－肝・夏－死－心・長夏－囚－脾・秋－休－肺」である。つまり、肝は自らが旺気する前の相にある訳である。「旺」期以外の他の局面にある時期に較べれば「出番に備えている時期」であって、かなり病みにくい状況下にあるのである。
- b. 一方、冬の病邪は（風・寒・暑・湿・燥・火の六因論）から言えば、「寒」邪である。それを、『難経』は、溪谷で氷結している氷冷な「湿」気としてとらえている。ゆえに足の下から冷え上ってくる寒さ、骨に伝わる寒さ、として理解しなければならないものである。つまり、冬の主気は「寒」であり、また『難経』の言う「湿」である。そして、その「寒」また「湿」あるいは「氷冷」と言う「冬の主気」がまた冬の邪気の主軸となるものである。
- c. 割合に病みにくい状況に位置しているのに肝は病を得たと言うのは、どんな場合であろうか？と考えないわけには行かないのが、『難経』の「痞気」に関する記述である。
 - イ. 生来その臓が虚弱である。
 - ロ. 一時的に食生活に乱れがあつて、それが肝を衰えさせていた。
 - ハ. 内傷が原因となっている状況で肝が一時的に衰えることになっている。
 等が挙げられるであろう。
- d. 肝が冬に外邪に侵されたものが脾に伝えられて慢性化したもの、あるいは、腎の病の影響を強く受けているが、冬は腎の旺気する季節であるから、腎の病の方は軽快するか治癒するかとなる訳である、肝から伝えられた脾の病症の方は固定して慢性的なものになってしまっているもの、（腎病が肝に影響したもの・冬の邪に肝が侵されてその影響が強く脾に出ているもの）の何れかであるということになる。
- e. 脾の方は、「旺・壮・死・囚・休」の五つ相のなかでは「囚」の相に位している。つまり、脾の力が衰退している最中・下降期の最中に位しているのである。したがって、腎が病を伝播されるのを拒否して脾に送り返すと言うのは、逆伝であるのに脾はこれを拒否する力量が無い、ま

して、もう一段階送り返して肝に戻す力は無いのである、このようなものとして認識できる位相にあるのである。

- f. 以上のように考察して行くと、内傷の伝病によって生じている可能性よりも外感病が慢性化した病の一つの形であると考えの方が適当であろうと思われる。

◎痞気の症候と診断の要点

A 症候

〈五十六難〉；「…在胃脘，覆大如盤，久不癒，令人四肢不收，発黄疸，飲食不為肌膚…」。

〈五十五難〉；「…積者，陰気也，其始発有常処，其痛不離其部，上下有所終始，左右有所窮処，…」。

〈五十二難〉；「…臟病者，止而不移，其病不離其処…」

〈三十七難〉；「…五臓不和，則九竅不通…邪在五臓，則陰脈不和，陰脈不和，則血留之，血留之則陰脈盛矣…」

つまり、腹部に奥深く痞結したものが在って、それは局所的には固定されている。そして、極めて緩解しにくい状態にあることが主な症候に他ならないのである。

◎痞気（脾積）について

- a. 痞気〈脾積〉の場合には、臍を中心とした部位に、お盆を覆えしているような痞塊が触診できるのであり、それは固定的で動かないのである。また、このような痞塊を触知されることの方が、病候〈四肢不收・黄疸・飲食不為肌膚など〉が現われるよりも先である。
- b. 「…積者，陰気也…」とは症候の状況が陰性であることを記述したものの解せられるのである。つまり、始まりも病候も明瞭さを欠いていて解りにくいものである、こういうものと解せられる記述である。
- c. 黄疸は「湿熱」病と解されて来ている、「湿熱」病とは長夏の代表病候である。脾臓に「長夏の鬱熱」が籠っている病でもある。
「伏気」があった、その「伏気」が、ある時ある状況のもとにおいて表面化するのであるが、その始発を確定し難いと言うのである。
- d. 「冬」とは、農歴の10・11・12月のことである。このなかでも、冬至に至る12月は、「陰気」が最高の状況にある季節である。「痞気」を病んでいる「脾」は、この冬の季節の「気」＝「氷冷さ」「氷湿さ」＝に、肝を介して最も強く剋されて（邪の横・逆剋・微邪、としての状況にお

いて) いるのである。冬の邪に最も剋されやすい所に位している臓は「脾之母」である「心」である(五行の循環局面では「死」の局面)。邪が母から子に伝えられる場合は「虚邪」とされている。しかし「痞気」にあつては「冬の邪」に侵された「肝」病からの病の伝変を、腎に転送しようとしても、逆に腎から拒否されて、戻された病に他ならないのである。つまり、旺気直前にある肝＝壮気の時期にある肝・このような肝であるから、「冬の邪」は受けたが、それを自分〈木〉にとっては何時も侮っている「脾」・しかも季節的にはもっとも機能が沈滞している「脾」であるから、二重に「邪」を転送しやすいのである。「腎」は旺気しているので、「脾」からの「邪」・しかも弱々しい状況の「邪」であるから、なお一層その「邪」は拒否しやすいのである。故に「脾」が「肝からの邪」を抱え込んでしまったのである。

肝の旺気時期である春とは、農歴の1・2・3月のことである。つまり「肝」は既に出番を待っている時期なのである。

参考 a 相生関係 木→火→土→金→水
 相剋関係 金→木→土→水→火

参考 b

	肝	心	脾	肺	腎	
春	旺	壮	死	囚	休	木
夏	壮	死	囚	休	旺	火
長夏	死	囚	休	旺	壮	土
秋	囚	休	旺	壮	死	金
冬	休	旺	壮	死	囚	水

肝	心	脾	肺	腎
春	夏	長夏	秋	冬
生	長	化	収	蔵

参考 c

正邪	自邪による病の場合
実邪	子性の邪による場合
虚邪	母位からの邪の場合
賊邪	畏位の邪による場合
微邪	侮位の邪による場合

- e. 以上のような状況であるから、病の最初の徴候が「覆大盆」のような痞塊が、「臍の部」＝「脾の部」に見られると言う症候のみではなく、他の面の症候も考慮して診るべきである。

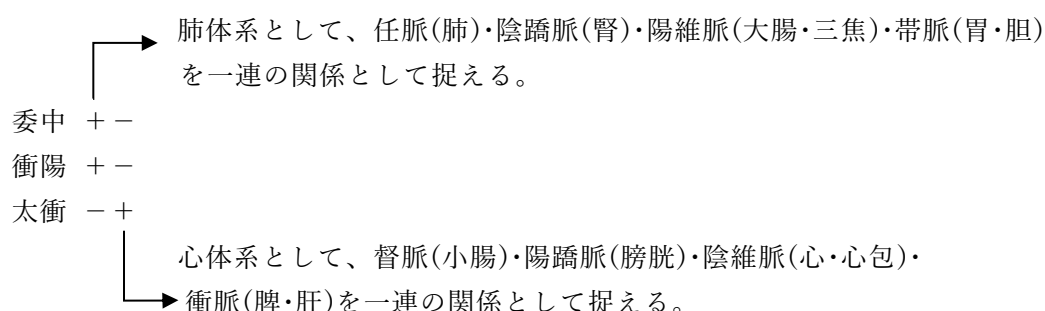
「臓の変動」や「邪の五行の表現」としての「邪の五行に響震する臓の五行」また「経脈・経穴における響震」の現象などが、腹部にも背部にも、「八虚診」に用いられる重要関節部にも、要穴部にも、複雑多彩な表現・現象を現わすのである。これらの点も考慮して、診察要点を、見落とさないように注意しなければなるまい。

「28 難」「29 難」「37 難」「49 難」「72 難」「74 難」などの記述を考慮すると、「陰蹻脈」「衝脈」「帶脈」「任脈」の重要な診察点・主に臍傍のものを中心にして、それぞれの経脈の枢要な診察点は見落とせない。

参考

- ◆「陰蹻脈」「衝脈」「帶脈」「任脈」の重要な診察点
「陰蹻脈」～～缺盆・交信・照海・石門・腎腧・大腿骨内側踝・次髎・踝痛。
- ◆[首の左右屈時および肩の違和感]
[脈＝両手尺ともに沈緊而細・ただし・寸や関の部に比し沈は浅く、中脈や時に浮脈のよう]
「衝脈」～～肓俞上約2寸・膝蓋骨前内側の上下・L4 棘突起〔主に左側〕・公孫・三陰交・陰陵泉・氣舎・肓俞。足の脾経上・胸腹の腎経上。
- ◆[首の軽い回旋時の違和感]
[脈＝3部とも沈・もっとも深い部位・弦長堅実]
「帶脈」～～肓俞下約2寸・膝蓋骨前外側の上下・帶脈・章門・臨泣・巨骨。
- ◆[首の後屈時の違和感]
[脈＝両手関部の浮・滑而緊]
「任脈」～～列缺・水分・陰交・石門・大腿骨内側踝・第2後仙骨孔・踝痛。
- ◆[首の左右屈時の違和感]
[脈＝3部とも沈・ただし衝脈の脈状よりも浅い・緊細而長]

参考……時任氏は、委中・衝陽・太衝の圧痛を診て脈診と対照して判断する。



- f. 「肝」は「冬の壬癸の日の気」(邪としての)を受けたのであるから、病を「脾」に伝送したとは言え、病の名残りを持っている訳であるから、その名残を見落とさないように深く留意すべきである。「脾」の「積」独特の腹症と「脾」の診察点を丁寧に診ることが重要なのは論ずるまでもない。しかし、「肝」の経上に「水の邪」を受けたことの反応は、その「木」経の「母穴」によく出ているものである。故に「極泉」と「中封」、そして一般的な診察点としての「胸脇」や「腹部での肝の診どころ」・「臍傍での「肝・風・木の診どころ」、背部での「肝の部」などが無視してはならない重要点である。

「冬の壬癸の日」の「気」は「腎」関連の部位に響震的に表現されている。華陀の子午表や靈龜八法の表や飛騰八法の表から「冬の壬癸の日」の穴の開闔の状態も研究して置かなければならない。

「脾」は「肝・木」から病を伝送されたのであるから、「脾」の診どころを丁寧に診なければならないが、その時、「肝・木」から病を伝送されたことを考慮して、「木」邪の反映を診る為に、それを「脾経」上の「木」性の部位に観察することが重要なのは言うまでもない。

g. 『素問』腹中論第 40・挙痛論第 39・太陽陽明論第 29

『素問』太陽陽明論第 29 に「……入五臓則臍滿閉塞、下為飧泄、久為腸澼……」とあり、挙痛論第 39 に「……寒氣客于腸胃之間、膜原之下、血不得散、小絡急引故痛……寒氣客于衝脈、衝脈起于臍元、隨腹直上、寒氣客則脈不通、脈不通則氣因之、故喘動应手矣。……」とあり、腹中論第 40 に「……有病膺腫頸痛胸滿腹脹…名厥逆……」「……夫陽入于陰・故病在頭与腹・乃臍脹而頭痛也。……」などがある。

これらの記述は、「積聚」の前段の症状と病理を記述したものと捉えられる。

B 診断の要点（および条件）

- a. ……
- b. ……
- c. ……
- d. ……
- e. ……

未完